

20世紀アメリカの生活デザインⅡ

－シアーズ・ローバックの通信販売カタログを事例として－

American life design in 20th Century II

－ Through the mail-order catalogues of Sears Roebuck －

田村沙織*・伊藤紀之**

Saori TAMURA and Noriyuki ITO

はじめに

20世紀アメリカは人々の生活が大きく変化した時代であった。その大きな変化をもたらしたものの一つとして、家事労働の機械化が挙げられる。種々の家庭用機器は人々を家事重労働から解放し、人々の生活を豊かにする上でこの上ない大きな役割を果たしてきた。特に、家事を担っていた女性には多大なる影響を与え、社会進出を促した要因の一つとして捉えられている。そして、人々の新しい生活様式を創造していく上で重要な手掛かりになったと考えられる。

前報¹⁾では20世紀アメリカを代表とするシアーズ・ローバック社の通信販売カタログが、当時のアメリカ社会や生活を知る上で、一つの手掛かりとなる資料であることを明らかにした。本報では前報に引き続き、シアーズ・ローバック社の通信販売カタログを資料とし、人々の生活の向上に多大に寄与した数々の家庭用機器の内でも、特に女性の生活を根本的に変えたと言っても過言ではなく、家事の中でも最重労働の一つであった洗濯作業の省力化を可能にした洗濯機に焦点を当てて、検討を進めたい。

1. 研究の目的と方法

前報に引き続き、1896年から1993年までに発

行されたシアーズ・ローバック社の通信販売カタログの内、1902年・1927年・1945年・1952年・1974年・1993年の6冊を主な資料とし、そこから読み取れる洗濯機の商品データから、大まかな洗濯機の変遷を把握するとともに、当時の洗濯作業がどのような労働であったのか、そしてどのようにして重労働から解放されてきたのか等、女性の社会進出との関わり合いを含めた当時のアメリカの生活変遷について考察する。

2. 女性の社会進出と家庭用機器

図1は1890年から1974年までの賃金労働者の中の全女性の割合と既婚女性の割合を示したものである。女性労働者は1910年頃から1920年頃にかけて一度減少するものの、それ以降年々

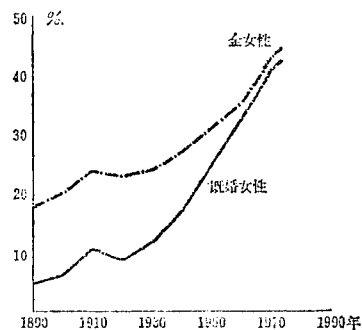


図1 賃金労働者の中の女性の割合²⁾

*家政学部建築・デザイン学科

**共立女子大学名誉教授

増加し1970年頃には40%を超えている。既婚女性の割合をみると、1890年では全労働者の5%程度であったのが徐々に増え、全女性労働者と同様に1910年頃から一時減少するものの、1920年頃より再び増え始め、1930年頃を境に独身女性と同程度になり、1970年頃では40%近くを占めて独身女性労働者を大きく上回っていることが分かる。因みに図2は女子労働力人口の推移を表したものである。

図3は1900年から2005年までのアメリカの耐久消費財の世帯普及率の推移を表したものである。電気（電球と同意）が半数の世帯に普及したのが1925年頃と見られるが、それと同時期か少し遅れた時期に主婦の家事労働の軽減に一役買ったとされる冷蔵庫と洗濯機の普及が始まっ

たということが分かる。その後、1950年前頃には衣類乾燥機、食器洗い機と続き、1970年頃には電子レンジと種々の家庭用機器(耐久消費財)が各家庭に普及している。今回取り上げた洗濯機は1925年頃から徐々に増え始めている。1940年手前から1945年過ぎにかけては第二次世界大戦の影響を受けてか、一時普及率は減少するが、1955年頃から再び増加していることが分かる。

以上の3つのグラフから女性の社会進出と今回調査対象とした洗濯機を含めた耐久消費財の普及率が、相互に関係していることが推察できる。女性の社会進出、特に既婚女性の労働者が目立つようになってきた1920年頃は全米で女性の参政権が認められるようになるなど、女性を取り巻く様々な環境の変化が見られた時期でもあったが、少なからずほぼ時を同じくして洗濯機をはじめとする耐久消費財の普及がはじまり、家事労働を担っていた主婦を含めた女性の社会進出に影響を与えた要因の大きな一つとして考えることができるであろう。

3. 洗濯機の出現状況

表1は今回調査対象とした全32冊のカタログに掲載された洗濯機の手動式洗濯機・ガソリン式洗濯機・電気洗濯機(電動式)の掲載点数の推移を表したものである。

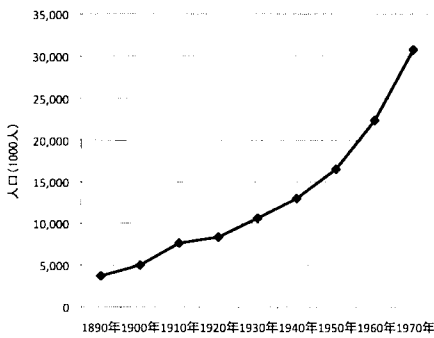


図2 女子労働力人口の推移³⁾

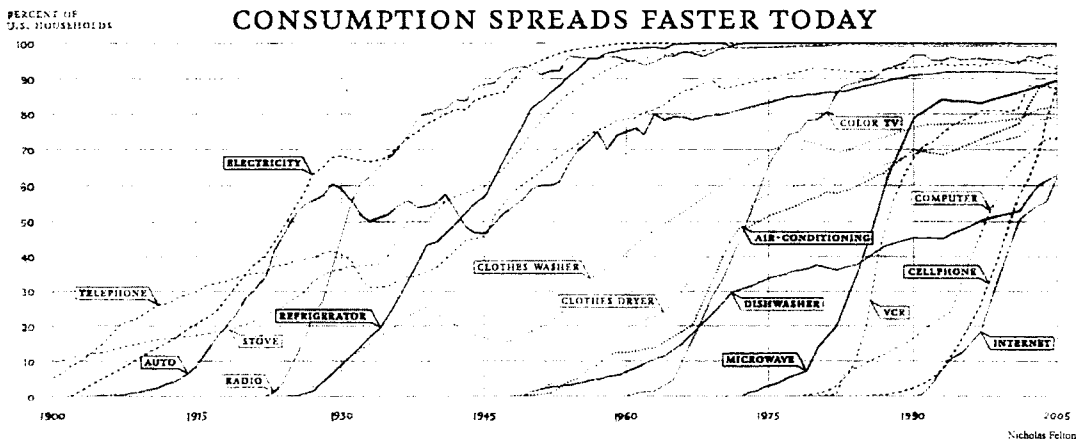


図3 アメリカの耐久消費財世帯普及率⁴⁾

表1 洗濯機の掲載点数

	発行年	S.S.	F.W.	Ch.	手動式	ガソリン式	電動式
1	1897年				5	0	0
2	1900年		○*		18	0	0
3	1902年				10	0	0
4	1902年		○		17	0	0
5	1909年		○*		6	0	0
6	1923年	○			5	5	3
7	1925年		○		4	0	6
8	1927年				4	0	2
9	1928年	○			5	0	3
10	1930年	○			3	1	3
11	1932年	○			3	2	4
12	1932年		○		3	0	0
13	1935年	○			1	2	7
14	1939年		○		6	8	14
15	1940年	○			5	7	11
16	1945年	○			0	0	0
17	1945年		○		0	0	0
18	1952年	○			0	1	6
19	1952年		○		0	0	8
20	1954年		○		0	0	14
21	1960年	○			0	0	27
22	1960年		○		0	0	18
23	1965年	○			0	0	25
24	1965年		○		0	0	20
25	1969年	○			0	0	40
26	1972年	○			0	0	38
27	1973年			○	0	0	4
28	1974年	○			0	0	36
29	1974年		○		0	0	40
30	1975年		○		0	0	32
31	1978年			○	0	0	0
32	1993年	○			0	0	59

S.S.: 春夏号 F.W.: 秋冬号 Ch.: クリスマス号

※Fall(秋号)

これにより、1897年には既に手動式洗濯機が掲載されていたことが分かる。洗濯機開発への関心が高かったアメリカでは、19世紀の終わりには約200社の洗濯機メーカーが生まれていたということからも、手動式は古くから掲載され、広く知れ渡っていたであろうことが伺える。

モーターで動く電気洗濯機がカタログに見られるようになるのは、今回調査したカタログの中では1923年が最初である。ガソリンエンジンを備えたガソリン式洗濯機も同年より掲載が見られる。アメリカのハレー・マシ社が初めて

円筒型電気洗濯機を販売したのは1908年であり、ガソリン式とは20世紀に入る頃に開発されたガソリンエンジンを洗濯機の動力として利用したものである。電動式やガソリン式がいつから掲載されるようになったのかについては今回の調査からは特定が難しいが、これらが登場した時期としては1910年から1923年の間であることが分かる。電動式はその後掲載され続け、主流になっていくことが読み取れるが、ガソリン式は1952年まで掲載が認められるものの、掲載されない年もあるなど不安定である。ガソリン式が姿を消した年代もやはり特定はできないが、1952年の春夏版を最後にその年の秋冬版に続き、1954年以降の掲載が見られないことから、1950年代に姿を消したと考えられる。

手動式は1940年まで掲載が認められるが、それ以降見られなくなっていることから、1940年代に姿を消し、遅くとも1952年には手動式の需要はなくなり、電動式へと完全に切り替わったことが伺える。しかし、少なくとも1940年までは手動式にも需要があったであろうことが推察される。

また、1945年は全ての形式の洗濯機の掲載が見られず、他の家庭用機器の掲載も見られないことから、戦争の影響を受けていることが考えられる。このことは、先に表した図3の洗濯機の普及率のグラフからも同じことが読み取れる。

4. 各年代の洗濯機の変遷と概要

<1902年>

1902年版には手動式洗濯機のみが掲載されており、「つまらぬ骨折りの家事労働を楽しいものにす」と謳われている。種類は6種類あるが、同じ種類のものでも容量の異なるものやボールベアリングの有無の違いによる製品を点数に含めると10点になる。値段は2.72～5.66ドルである。一回に洗える量は洗濯機の種類にもよるが、6～7枚のシャツやそれと同量程度の衣類と表記のあるものと、6～8枚のシャツと6枚程度のタオルかハンカチが限度と書かれたも

のが見られる。使い方は、石鹼を溶かしたお湯を入れ、10～12分間レバーを動かした後、絞り、きれいな水で2～3分すぐことと書かれている。洗濯機によっては、前日に汚れたところを石鹼水に浸け、脱水機に通してから洗濯機に入れることと書かれているものもある。種類は複数見られるが、波形のついた木製の洗濯槽に、先端に数本の脚の付いた棒や洗濯板をカーブさせたようなもので衣類を押しつけて擦るというもので、原理としてはどれも洗濯機がまだない頃に人々が行っていた、洗濯板に衣類を擦りつけて汚れを落とすといった作業を機械が行うというものであると見られる。(図4a, b)しかし、原理は同じであっても、形状を変えたり、ボールベアリングや平衡輪を使用することで、「以前のものよりも3分の1楽にできるようになった」ということや、「できるだけ少ない力で子供でもハンドルを回せるようになった」という表記が見られることから、あらゆる工夫をして家事労働を楽にしようと試行錯誤の上、次々と新しいものが考案され、開発が進んでいたことが推察できる。

<1927年>

1927年版には、手動式洗濯機4点に加え、電気洗濯機が2点掲載されるようになる。種類は手動式が3種類、電動式が2種類である。

電動式の2種類とは円筒型(図5)のもの、

攪拌式(図6)のものである。円筒型は今回調査した中で電動式が見られるようになった1923年から掲載されていた形式のものであり、シリンドラー(円筒槽)を回転させることにより汚れを落とす叩き洗いを電化したものである。カタログには、石鹼水を入れたアルミニウムのシリンドラーを前後に往復させると書かれている。アメリカでは、ハレー・マシ社が1908年に初めて販売したと言われている。

攪拌式とは、アメリカで1922年にメイトグ社のチーフ・エンジニアであったハワード・F・シニダーにより発明されたものであり、円筒形の洗濯槽の底中心に攪拌翼があり、左右に攪拌して洗濯作業を行うものである。今回の調査では1927年に初めて見られるようになる。使い方は、洗濯槽に湯を注ぎ、石鹼あるいは洗剤を加え、その中に衣服を入れて、蓋を閉めてボタンを押すだけということで、非常に簡単にできると書かれている。容量は7枚のシャツが入ると書かれているが、時間は以前よりもはるかに短縮できるようになったとあるものの、具体的な表記は見られない。

「クリーニング代や洗濯女に支払う代金よりも安く済む」との記述がみられるが、値段は円筒型は79ドル、攪拌式は92ドルであり、当時の雇用者の月間平均所得66ドル⁵⁾と比べると高価なものであったことが伺える。そのことは、洗濯機の普及率のグラフからも推察できるが、当



図4a 手動式洗濯機, 1902年版

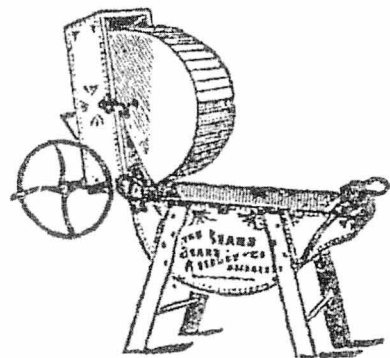


図4b 手動式洗濯機, 1902年版

時はまだクリーニングに出したり、洗濯女に頼んでいたという家庭も多かったということが分かる。

手動式は1902年に掲載されていた商品と比べても形状や機能に大きな変化は見られない(図7)が、「Get rid of the washboard! Enjoy life!」といったことや、「Health is Wealth-protect yours. Use a washing machine.」「No need to dread the work of washday.」というような1902年には見られなかった記述が見られるようになる。また、洗濯板の他、バキューム・ウォッシャー (Vacuum Clothes Washer)

(図8)と呼ばれる洗濯棒も掲載されている。このことから、電動式が掲載されてはいるものの、未だに手動式でさえも備えていなかった家庭が多数あったであろうことが推察できる。また、アメリカでは洗濯日が設けられ、その洗濯作業が過酷な肉体労働であったと同時に、精神的にも負担になっていたであろうことが想像できる。因みに手動式洗濯機の値段は4.95ドル~15.95ドルと幅広くなっている。

<1945年>

1945年版は先にも述べたように、洗濯機の掲載は見られなかった。



図5 円筒型電気洗濯機, 1927年版



図7 手動式洗濯機, 1927年版



図6 攪拌式電気洗濯機, 1927年版



図8 バキューム・ウォッシャー, 1927年版

<1952年>

1952年版には電動式 5 点とガソリン式 1 点が掲載され、手動式の掲載は見られない。(図 9) 秋冬版ではガソリン式も姿を消し、電動式のみ掲載となっている。電動式が 2 点しかなかった 1927年の頃と比べると掲載点数は増大したが、その種類は脱水機が取り付けられた攪拌式の 1 種類のみとなる。電動式が出てきた初期の頃から年々改良を繰り返して掲載されていた円筒型のものは掲載されなくなる。

洗濯重量は 7 lb. (約 2.6kg) のものとファミリーサイズとして紹介されている 9 lb. (約 3.3kg) の 2 種類である。値段は 79.95 ドル～129.95 ドルで、容量や 3 枚か 6 枚という攪拌翼の羽根の数の違いにより多少異なっている。因みにガソリン式は 134.95 ドルと電動式に比べると値段は多少高めである。しかし、ガソリン式がまだ掲載されていた 1930 年代のカタログには値段はガソリン式の方が電動式よりも高めであるが、経済的であるとしている。さらに、電気のない家庭でも使用できるとし、電気が数カ月、あるいは数年来なくなってしまうと、労働仕事を便利に楽しくできるとの記述が見られる。1952年版には電動式への転化も簡単にできると

の記述がある。これらのことから、1930年代にはまだ電気のない家庭もあったということ、1950年頃にもまだガソリン式を使用していた家庭があったということが推察できる。先に示した耐久消費財の普及率の推移からも大恐慌の影響を受けてか 1930年代に一時電気の普及率が下がっており、1950年代ではほぼ 100%に近いものの完全ではないことが分かる。

また、この年セミ自動洗濯機 (Semi-automatic) が登場する。(図 10) これは 20 分以内で任意の時間に設定できるタイマーが内蔵されているものであり、設定した時間になると自動的にストップし、ベルが鳴るという仕組みになっている。加えて、脱水機はそれまで手で設定していた強さの調整を、かさばる毛布からハンカチやナイロン製品まで自動で判断し調整を行うというものとなっている。セミ自動洗濯機といってもこのような簡単なものであるが、それでも自動停止のタイマーが付いたことで、「素晴らしい余暇の時間がより充分得られ、衣類にもやさしい」と紹介されており、徐々にではあるものの確実に家事が楽な方向に向かっていることが伺える。また、断熱性のある洗濯槽を用いることで長時間保温できるとの記述があることから、お湯を用いていたことが分かる。洗濯重量は他のものと同じ 9 lb. (約 3.3kg) であるが、値段は 154.95 ドルとこの年掲載されている洗濯機の中で最も高価な商品となっている。因

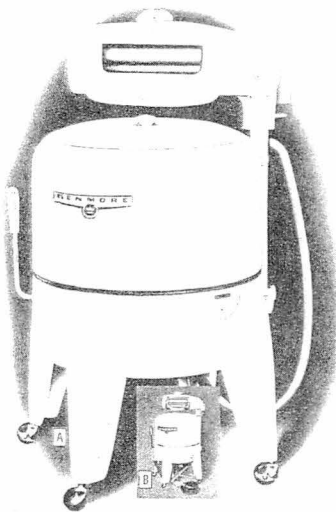


図 9 電気洗濯機とガソリン式洗濯機(下), 1952年版

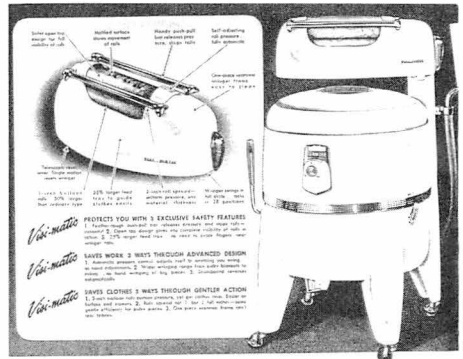


図 10 セミ自動洗濯機, 1952年版

みにこの年の雇用者の月間平均所得は115ドル⁵⁾である。

さらに、この年自動衣類乾燥機が掲載されるようになる。(図11)これは、温度とタイマーが設定でき、重い洗濯物を持って物干しまでの階段を上らなくても、雨や風の日でも室内に干す必要がないと記述されている。

<1974年>

1974年版では、トップローディングタイプ(top loading)の全自動洗濯機のみ掲載になった。(図12)洗いとすすぎの間に手動でお湯の入れ替えを行わなければならなかった以前の電気洗濯機に加え、洗いからすすぎ、脱水までを行ってくれる全自動が見られるようになったのは今回の調査では1954年であり、1972年には完全に全自動洗濯機のみ掲載になった。

トップローディングタイプの全自動洗濯機は1947年にGEが発売したもので、四角い箱の上面にふたがあり、これをあけて洗濯物の出し入れをする構造であり、途中に出し入れすることも可能となっている。洗濯槽の中心に攪拌翼があり、左右に一定の角度で羽根を動かし衣類を攪拌するものである。

1974年版のカタログでは2から10段階もの洗濯物の状態による調整の他、温度や水量、速度切り替えが可能となり、あらゆる素材や種々の汚れの状態に対応できるようになっている。そ

の一例として、normal, permanent press, delicate fabrics, knit-delicate, pre-soak, pre-washといった設定がある。乾燥機にも設定機能が付けられている。

さらに、ポータブル洗濯機(Portable Washer)として持ち運び可能な洗濯機も掲載されている。これは、洗濯をしたい時にだけ台所に運び、直接キッチンの蛇口から水をとることで、特別な配管工事や設備を必要としないということである。

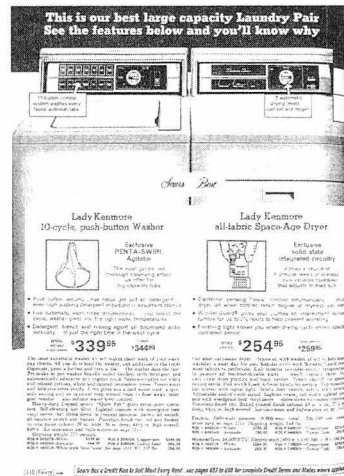


図12 全自動洗濯機と乾燥機, 1974年版

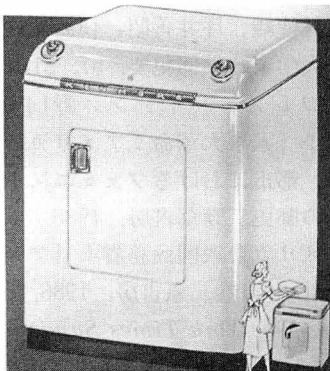


図11 自動衣類乾燥機, 1952年版

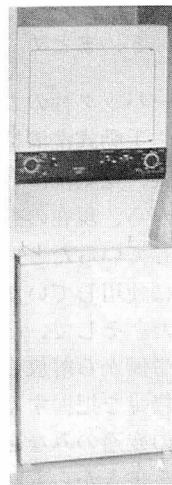


図13 全自動洗濯機と乾燥機, 1993年版

因みに、添え書きには大変な洗濯日の負担を最小限にすると書かれている。洗濯機や乾燥機に数種類の色違いのものが掲載されており、機能のみならず、幅広い面で選択範囲が広がってきていることが分かる。

<1993年>

攪拌式の全自動洗濯機が掲載されている。(図13) それまでのようにあらゆる布地に対応して洗濯できる機能に加え、自動でより洗浄力のある適切な水温をコントロールし、使用者が頻繁に使用するプログラムを記憶して、操作がより簡単にできるようになっている。水を再循環させることで、節水ができると謳われているものもある。乾燥機に関して自動のコントロールセンサーが取り付けられ、衣服が完全に乾いたら停止する仕組みになっている。そのことから、エネルギーの節約と乾かしすぎや生乾きを防止することができるとしている。また、1974年同様、ポータブル洗濯機の他、乾燥機と洗濯機が上下一体型となったものが掲載されている。同じ種類の洗濯機でも容量や機能が異なるものが掲載され、各家庭に合った容量や調整機能を備えたものを選択できるようになっており、それが節水や節電につながるということが書かれている。

5. まとめ

シアーズ・ローバック社のカタログを通して、洗濯板の時代から手動式洗濯機を用いるようになり、ガソリン式、電気洗濯機が登場し、形状や機能を変えながら、現在のものに近い全自動洗濯機へと変化していったという20世紀アメリカの人々が実際に使用していた洗濯機の変遷を見ることができた。そして、それらが女性を洗濯作業という重労働から解放しつつ、家庭へと浸透していった経緯を把握することができた。

さらに、機能の変遷のみならず、商品とともに記載された添え書きからも時代の変化を伺い知ることができた。1900年代初めの記述からは、

洗濯作業が健康を害するとまで言われ、恐れられていた程の重労働であったということが分かり、洗濯日を少しでも楽しいものにすることを目指した内容のものが多く見られた。その後、年代を追う毎に少しずつ表現に変化が見られるようになり、1952年頃の記述からは余暇の時間を増やし活用できる時代になったであろうことが推察できる。つまりは、女性が社会に出ている時間や趣味に費やせる時間が得られるなどのゆとりを生みだすことのできる時代になったということである。さらには1993年頃にはエネルギーの節約を目的とした記述が見られるようになるなど、家事労働を担う主婦の身体への負担軽減を目的とするものから、余暇を活用する、さらには家計への負担軽減を目的としたものへと変化していることが分かった。

20世紀のアメリカの人々が愛用していた通信販売カタログから、洗濯作業が過酷な家事労働であったということ、そして、時代とともにそれらから解放されていく当時の生活様式の状況や人々が洗濯機に求める役割の変化を伺い知ることができ、洗濯機が女性の生活様式を大いに変化・向上させたということを読み取ることができた。

そして、この生活様式の変化・向上にシアーズ・ローバック社のカタログが大きな役割を担ったであろうということが改めて実感できた。

参考・引用文献

- 1) 田村沙織、坪井善昭、伊藤紀之：共立女子大学家政学部紀要，57，81-100 (2011)
- 2) ドロレス・ハイデン／野口美智子 他訳：『家事大革命：アメリカの住宅、近隣、都市におけるフェミニスト・デザインの歴史』勁草書房，1985，p.25
- 3) アメリカ合衆国商務省：『アメリカ歴史統計・第1巻』原書房，1986，p.133
- 4) *The New York Times Sunday Opinion*, Sunday, February 10, 2008
- 5) 3) に同じp.164

- 6) 大西正幸：『電気洗濯機100年の歴史』
技術堂出版，2008
- 7) S-ギーディオン／GK研究所、榮久庵祥
二 訳：『機械化の文化史 ものいわぬも
のの歴史』鹿島出版会，1977